

A. 予防教育の充実

問題点:子どもが生活する環境において、様々な健康リスクが絡み合う中(添付資料)、現在の学校教育では1次予防に重点がおかれたカリキュラムとなっている。



2次、3次予防教育の充実が必要か?!

- ・治療法
- ・緩和ケア、等

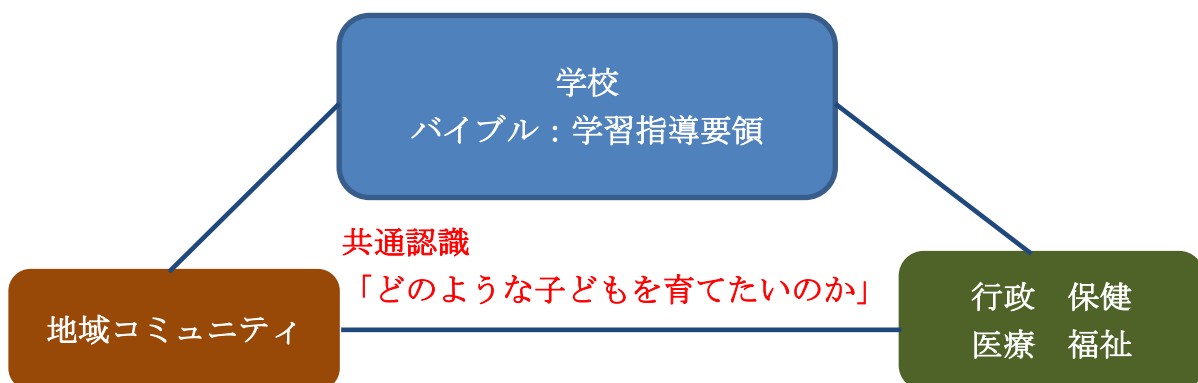


人の生涯を見通したうえで学ぶべき重要な健康課題を取り上げ、「健康」「幸福」という考え方を多角的に教育し、定着を図ることは子どもの**健康自己管理能力**の向上につながり、人々の将来の生活を豊かにする。その際、教育に関わる者において、個々の課題を教えながら、子どもの健康自己管理能力という基盤となる能力を育てるという認識が重要である。このような教育により、学校を核とした0次から3次までを含む統合的な予防教育の充実をはかることができる。

B. 学校を中心とした地域、行政、保健、福祉、医療の連携の重要性

子どもの健康リスクを考えるうえで、学校・地域・行政・保健・福祉・医療の連携が今後更に重要になると考える。地域の子どもが一堂に会する学校が保健教育の中心となるのは自然の流れである。しかしながら、学校で遂行すべきカリキュラムは学習指導要領等で決められ、各学校においても、年度当初の年間計画において決定されている。しかも保健教育にあてられる時間には限りがある。新たな企画を遂行するための時間を学校で確保するのは難しい。よって、学校以外の機関と連携し、様々な場や機会を活用して、子どもの健康教育を展開する必要がある。また、保護者や地域の住民、専門家など子どもと関わる大人の参画を促進する必要もある。

子どもの教育に必要な内容は「学習指導要領」にほぼ示されているといっても過言ではない。その学習指導要領を様々な機関において保健教育の基本として共有し、連携する機関が同じ目線でその地域社会で取り上げるべき子どもの健康リスクについて協議し、すべてのプロセスに共通認識をもって健康教育にあたることが重要である。



添付資料. 健康リスクについてのブレインストーミング

